

聖書：創世記 29：1～30

説教題：もう七年間

日時：2024年2月11日（朝拝）

ヤコブは前の 28 章で初めて主と個人的に出会う経験をしました。前章の 15 節で主はヤコブに「見よ。わたしはあなたとともにいて、あなたがどこへ行っても、あなたを守り、あなたをこの地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを成し遂げるまで、決してあなたを捨てない」と語っていただきました。そして彼が神の守りを確信できるように、天から地にかけられたはしごの上を天使が上り下りする光景を見させてくださいました。この日以来、ハランに向かうヤコブの足取りは随分違ったものになったのではないのでしょうか。実は 29 章 1 節の「ヤコブは旅を続けて」と訳されている部分は、直訳すれば「ヤコブは足を高く上げて」という表現になっています。ここには主を出会う経験を通して心に励ましを与えられ、まるでスキップするかのよう足高く上げて前へ前へと進んで行ったヤコブの姿が描かれているのかもしれない。

さてそんな彼に思ってもみなかった素晴らしい導きが連続します。彼がふと目を上げて見ると、野に一つの井戸がありました。ちょうどその傍らに三つの羊の群れが伏していました。昔は今日のグーグルマップのように現在地をすぐ確認できる方法がありませんから、ヤコブは今、自分がどこにいるか分かりませんでした。そこで羊飼いたちに問うてみます。「兄弟たちよ、あなたがたはどこの方ですか。」すると何と彼らは「私たちはハランの者です」と答えました。ヤコブはまさにそのハランを目指して旅をして来たのです。その地名を聞いた瞬間、彼はまるで身体に電流が流れるかのようなショックを受けたのではないのでしょうか。彼は続けて問います。「あなたがたはナホルの子ラバンをご存じですか。」すると彼らは「よく知っています」と答えました。まさかの展開にヤコブの方が慌てたことでしょうか。しかし神の導きはまだ終わりません。ヤコブが「その人は元気ですか」と問うとどうだったのでしょうか。何と彼らは「元気です」と教えてくれたばかりか、「ほら、娘のラケルが羊を連れてやって来ます」と言うのですから、ヤコブとしては信じられない答えの連続でした。もしかすればとんでもない方向に来ていた可能性だって十分あり得たにもかかわらず、彼は突然、自分が考え得る最高の状態にいることを知ることとなったのです。

7節でヤコブは「ご覧なさい。日はまだ高いし、群れを集める時間でもありません。羊に水を飲ませて、草を食べさせに戻ってはどうか」と言います。これはどういう意味の言葉だったのでしょうか。当地のことは当地の人々の方が良く知っているであろうに、なぜ出過ぎたことをヤコブは言ったかと思いますが、おそらく前の6節で「はら、娘のラケルがやって来る」と聞いて、ヤコブはここに他の人たちにいてほしくないと考えたのでしょうか。周りに誰もいない状況で彼女と出会いたいと彼は願った。しかし羊飼いたちには羊飼いたちの事情があります。ヤコブの思う通りには行きません。

そんな中、ついにラケルがやって来ます。ヤコブは彼女と彼女が連れて来た羊の群れを見ると突然動き始めます。2～3節に記されていた通り、井戸の口に蓋をしていた石は大きく、通常は何人かが力を合わせてやっと動かすことができるものだったようです。ところがヤコブはそれを一人で転がしてしまいます。家の近くで生活することを好むヤコブでしたが、実は相当な力持ちだったことが伺えます。彼はここで大ハッスルします。そしてラケルが連れて来た羊、すなわち母の兄ラバンの羊の群れに水を飲ませました。そしてヤコブはラケルに口づけし、声を上げて泣いたと11節にあります。主と出会う経験をして励ましを受けたとは言え、これまでずっと心細い一人旅を続けて来たヤコブ。見知らぬ土地で求めている人たちと本当に会えるのかどうか不安だったに違いないヤコブ。その彼は一気に安堵し、このように感情を露わにせずにいられなかったのでしょうか。そしてラケルに自分は彼女の父の甥であり、リベカの子であることを告げます。ラケルもそれを知って驚き、急いで走って行って父にこのことを告げます。こうしてヤコブはラバンの家へと行くことができました。彼は事の次第をすべて話し、ラバンに受け入れてもらえました。そして彼のところで一か月滞在しました。

ここまでは特に問題はありませんでした。一か月後、ラバンはヤコブにこう言いました。15節：「あなたが私の親類だからといって、ただで私に仕えることもないだろう。どういう報酬が欲しいのか、言ってもらいたい。」ヤコブは贈り物を持ってこの家に来たわけではなく、むしろ裸同然の無一文でやって来ました。そんな彼はこの家でお世話になるために、この一か月間も一生懸命働いたのでしょう。その働きぶりを見てラバンは彼に報酬を与えて、なおこの家に引き止めておこうと考えたのでしょうか。するとヤコブは心にある願いをラバンに告げます。ヤコブは実はラケルを愛していました。ラバンには二人の娘がいて、姉の名はレア、妹の名はラケルでしたが、17節に

ある通り、レアの目は弱々しかったのに対して、ラケルは姿も美しく、顔だちも美しかったとあります。きっとヤコブは最初にラケルに会った時、すでに一目ぼれしたのでしょう。そこでどのように大ハッスルしたのもあったのでしょう。そこでヤコブはラバンに答えます。「私はあなたの下の娘ラケルのために、七年間あなたにお仕えます。」ラバンにとってもこれは都合の良いことでした。彼は「娘を他人にやるよりは、あなたにやるほうがよい。私のところにとどまっていなさい」と言って承認します。こうしてヤコブは7年間仕えることにしました。20節後半には「ヤコブは彼女を愛していたので、それもほんの数日のように思われた」とあります。愛する時、その人の世界は変わることをこれは物語っています。現実にはヤコブの生活に多くの苦労があったであろうにもかかわらず、ラケルを愛している彼にとって苦労は全く苦労ではなかったのです。愛は私たちの人生の見方を変え、私たちを新しい力に生かします。ヤコブにとってこの7年間はあつという間のことだったのです。

こうして7年の月が満ちた時、ヤコブは「私の妻をください」とラバンに願い出ます。そこでラバンはその土地の人たちをみな集めて祝宴を催しました。ヤコブにとって待ちに待った日です。ところがラバンは妹のラケルではなく、姉のレアをヤコブのところへ連れて行きました。ヤコブはそのことが分からなかったようです。時は夕方で周りは暗かったからかもしれません。また花嫁はベールをつけて顔を覆っていたからかもしれません。てっきり相手はラケルだと思って彼は最初の夜を過ごしました。ところが翌朝になって見ると、それは何と姉のレアでした！この時のショックを私たちははかり知ることができるのでしょうか。彼はラバンに言います。「あなたは私に何とすることをしたのですか。私はラケルのために、あなたに仕えたのではありませんか。なぜ、私をだましたのですか。」これに対してラバンは答えました。「われわれのところでは、上の娘より先に下の娘を嫁がせるようなことはしないのだ。」そしてさらに続けます。27節：「この婚礼の一週を終えなさい。そうすれば、あの娘もあなたにあげよう。その代わり、あなたはもう七年間、私に仕えなければならない。」ラバンはヤコブを長く自分の下で働かせるため、最初からこのように彼を出し抜くことを計画したのでしょう。ヤコブはこれを受け入れるしかありませんでした。この婚礼の一週間を過ごして後、妹のラケルをも妻に迎えます。後のレビ記18章18節では姉妹の両方と結婚し、妻とすることは禁じられます。ヤコブはこうしてこれまでの七年間に加えてもう七年間、ラバンのもとで仕えなければならなくなったのです。

以上の箇所は私たちに何を語っているのでしょうか。ここに「主」とか「神」という言葉は出て来ません。その主または神の視点からの神学的説明も一切ありません。ただ起こった出来事の羅列があるだけです。こうすることによって、かえってこの箇所は私たちに自分で深く考えるようにと仕向けているのでしょうか。私たちはここで何を思うべきでしょうか。まずここまで読んで来た者が思うのは、明らかに 27 章とのリンクです。27 章の後半、18 節以降でヤコブも他の人をだましました。父イサクをだまして、兄エサウの祝福を奪い取りました。それと同じように自分もされた！ということここを読む者は誰もが思うのではないのでしょうか。この二つの記事には驚くほど類似点あるいは平行関係があります。ヤコブは父イサクに美味しい食事を食べさせた後、だましました。それと同じようにヤコブは今日の箇所で祝宴で美味しいものを食べさせられ、満足した気持ちになっていたところをだまされました。ですから私たちが誰かに美味しいものを食べさせられた時は注意しなければならないかもしれませんね！またヤコブは父イサクの目が良く見えないのをいいことにだましました。ヤコブもここで夕方、良く見えない状況でだまされました。またヤコブは自分の体に毛皮を巻き付けるなど変装して父イサクをだましました。そのヤコブはおそらくここでレアがベールを上にとっていたためにだまされました。つまり彼は自分がした通りにされたのです。彼は 25 節で「なぜ私をだましたのですか」と叫んで相手を責めました。その言葉は後で自分にも跳ね返って来るのを感じたことでしょうか。自分だって同じことをしたのではないかと。そんな彼にとって 26 節のラバンの言葉さえもゴディブローのように効いて来る言葉だったかもしれません。ラバンは上の娘が先である。下が飛び越してはいけないと言いました。まさに自分は兄を飛び越して、先に兄の祝福をつかみ取ろうとし、実際にそうしました。それは道理に反することだとラバンは言っています。まさにそのようなことを自分はしたということも、じんわり思い起こさせられたのではないかと思います。

27 章を読んだだけでは、もしかするとヤコブのずる賢い行動も結局は主に嘉された、おとがめなしで祝福されたと読めてしまうかもしれません。しかし決してそうではないのです。蒔いた種は刈り取ることになるのです。ヤコブはこの日、一緒に寝ていたのがレアだと知ってどんなに激しいショックと怒りを覚えたことでしょうか。そしてラバンに出し抜かれ、二人の妻を持つことによって、どんなにストレスの多い毎日を過ごさなければならなくなったことでしょうか。こうして彼は自分が他の人にした通りのことを自分も味わうようにされたのです。想像もしていなかったまさかのし

っぺ返しをこんな形で長期に渡り、受けることとなったのです。

しかし私たちはたださばきという観点からだけ今日の箇所を読むべきではないと思います。今日の箇所を読むにあたってもう一つ関連付けるべきリンクは直前に見た28章です。そこで主は「わたしはあなたとともにいて、あなたがどこへ行っても守る」と言われました。「あなたを決して捨てない」と確約されました。そのお言葉と今日の箇所はどう調和するかということです。果たしてヤコブが朝になって、そばにいたのはレアだと知ってショックを受けた時、主は彼とともにいたのでしょうか。答えはイエス！です。主はそう言うておられました。どこへ行ってもあなたとともにあり、あなたを守ると。つまり主がともにいるとは、私たちにとって物事がうまく行くとか、祝福ばかりが生じるということではないのです。むしろうまく行かないことにおいても主はともにおられる。主はヤコブとともにいる方として今日の箇所のことも起こるようになされたのです。それは彼が過去の自分の罪を悔い改め、聖い者へと造り変えられて行くためです。創世記27章のあのような振る舞いは全く悪いものであることを自らの身を持って体験し、同じ生き方を今後しないためです。人間的なずるい方法によってではなく、神にこそ信頼を置き、神が喜ばれる正しい道を行く者となるためです。ヘブル人への手紙12章5～7節：『わが子よ、主の訓練を軽んじてはならない。主に叱られて気落ちしてはならない。主はその愛する者を訓練し、受け入れるすべての子に、むちを加えられるのだから。』訓練として耐え忍びなさい。神はあなたがたを子として扱っておられるのです。父が訓練しない子がいるのでしょうか。」愛すればこそ神は懲らしめ、訓練するのです。それはご自分の子どもとして扱っておられるからです。この結果、ヤコブはもう七年間、働かなければならなくなりました。最初の七年間はあっという間でしたが、後の七年間はそうは行かなかったことでしょう。苦々しい思いの中で、ラバンにだまされたという屈辱的な思いの中で、その時を過ごさなければならなくなります。これは彼自身が蒔いた種であると同時に、神がヤコブを愛しておられるからこそ彼に起こったことなのです。ヘブル人への手紙12章の続きの10節には、私たちの天の父、霊の父は「私たちの益のために、私たちをご自分の聖さにあずからせようとして訓練される」とあります。また11節：「すべての訓練は、そのときは喜ばしいものではなく、かえって苦しく思われるものですが、後になると、これによって鍛えられた人々に、義という平安の実を結ばせます。」このような良き実をやがて結ばせるための神の愛によるお取り計らいでもあったのです。

私たちは今日の御言葉を通して、改めてずるい方法で祝福を手に入れようとしてはならないと戒められます。神の命令を無視して、人間的な知恵と方法で祝福をつかみ取ってはならない。仮にその時はうまく行っても、結局はその報いを刈り取るようになります。むしろ後に恐ろしい代償を払わせられることになります。そのことを思っ
て神が良しとする道のみを進み、神から祝福をいただく者となることを求めて歩む者とされたいと思います。

一方、私たちは過去に犯した過ちのために今苦しみのただ中にあるかもしれません。しかしもし悔い改めの心を持って主を仰いでいるなら、この苦しみに神の恵みがあることを覚えたいと思います。ローマ人への手紙 8 章 28 節：「神を愛する人たち、すなわち、神のご計画にしたがって召された人たちのためには、すべてのことがともに働いて益となることを、私たちは知っています。」 この「すべてのことがともに働く」という部分の「すべて」には、大変奇しいことですが、私たちの罪や罪のための苦しみも含まれます。その苦しみは決して単なる自業自得で終わるものではないのです。そのことさえも神は用いて私たちをご自身に似る者となるように、そして栄光のゴールにたどり着く者となるように導いてくださいます。その神を見上げて、悔い改めをもって神の憐みにすがる者へと導かれたいと思います。このプロセスを経て神は確かにやがて良い実を結ばせてくださることを続くヤコブの生涯に見つつ、私たちも神に望みを置き、神に練り聖めていただいて、神が望まれる者へと成長することができるように、愛の御手を信じて祈り求めて行く者たちでありたいと思います。